

## K より其の妻へ

川 浪 道 三

T子——

今朝お前の第二の手紙を受取つた。著いた翌日に出した第一の手紙を受取つてからこの五日お前の便りに接しなかつたが、田舎は法事などといふと大袈裟にやる習慣があるから、お前も多分その爲に忙殺されて居るのだらうと思つて居た。然し今度のお前の手紙で、お前が法事のあつた翌日、お前の亡くなつたお母さんの故郷のN町に行き、其處でY家の祖先の百五十年祭をして、八日にまたS町に歸つて來たといふことを知つた。

『四月八日は私とエチカ(夫の愛稱)が初めて會つた日でした。その記念日に私はさうした旅をして居ました。そして東京にもおなじくこの雪と雷とがあつたやうな氣がして、あの井戸ばたのありさまと、それから雷をどんなにエチカが恐れて居るだらうといふやうなことを頻りに思つて居ました。』

こんなこともお前は書いた。實際その日はこちらでも雹が降つたり雷が鳴つたりした。そして

お前が察した通り、お前はドテラを引冠つて、机の上に俯伏しながらお前のことを思つて居た。雷が止んで來ると次第に氣が弛んで、いつの間にかうとうとして眠つてしまつた。

然し間もなくお前は眼が覺めた。そして寂しい部屋の中に自分一人を見出した。緣先に出て見ると、雨は止んで居るけれども、空はまだ陰氣くさく曇つて居る。前の庭に萌え出した露の葉が、次第に迫つて來る夕暮の中に顫えて居るのが寂しかつた。孤獨といふ感じが沁々と胸に込み上げて來た。聽てお前は晩の御飯の仕度をする爲に勝手の方へ行つた……

然しT子よ、お前は今自分の孤獨を、寂寥を、少しも不幸だとは思つて居ない。お前は寧ろ彼等に感謝して居る。孤獨と寂寥とは自分に多くのものを與へてくれる。勿論それに堪へることは辛い。けれどもお前はそれを忍ぶことに依つて、おれを深くし、おれを強くすることが出来る。實際おれはお前が此處を立つてからこの一週間ばかり、町には用事で唯だ一度出たきりだ。E君と時々話すほかは大抵家に一人の世界をまもつて、心の底から湧いて來る聲に耳を傾けて居る。そして自分でも不思議に思はれる程のところまで歩いて居るのに氣が付いた。そこに立つて自分を見廻すと、自分といふものが透明になつて、今までボンヤリして居た周囲がハッキリとなつて見える。そしておれはおれの中に、何とも言へない嬉しい、涙ぐみたいやうな、強い力の湧いて來るのを覺える。おれは今その力の前にひれ伏して、どうぞ見捨て、下さるなと言ひたいやうな氣がして居る。





もとよりおれは弱く、力が足りない。精神的にも、肉體的にもさうである。おれはおれ自身の中に悲劇を持つて居る。おれはそれを自分に耻かしく思ふ。おれはそれを罪惡のやうな氣がして居る。どうかしてそれを償はなければならぬと思つて居る。然しさういふ自分であればこそ、おれはおれに湧いて來たこの力を自分の爲にどんなに嬉しく思ふであらう。おれの中の悲劇の價值を進めるのも亦この力より外にはない。弱いおれのことだ。この勇氣は、他の人に取つては何でもないことからでも打ち碎かれるやうなことがあるかも知れない。又はおれ自身の中の疲勞に依つて消失するやうな事があるかも知れない。事實おれは今まで度々それを経験した。恐らく今後度々経験することであらう。けれどもおれは今直ぐそれを回復し得るやうな氣がして居る。その力をつかんで居るやうな氣がして居る。そしておれはこれを孤獨と寂寥との賜だと思つて居る。孤獨と寂寥とが機縁となつて、おれの中に眠つて居るものを醒ましてくれたのである。然しおれは境遇的に孤獨で寂寥でなければおれの生長がないといふ風には考へない。そんなことは當然の十倍以上だ。けれども從來のおれの心に中には、さういふ外的條件に對する要求がかなり強く働いて居た。その爲におれはどの位苦しんだか知れない。そしてそれもおれの持つて居る悲劇の一つであつた。どうかするとつまらぬことからお前と争つて、物を言はないやうな日が續いた。何といふ馬鹿なおれだつたらう！

『場所の變更に救ひを求めて失敗らないものは一人もなかつた。救ひはこれを自己に求めなければならぬ。』

チエホフの『決闘』の中にあるこの言葉を、おれは時々お前にさへ言つて聞かせる癖に、おれはいつの間にかそれを忘れて旅の空のことなどを思つた。然し月末のことを思ふと、その心はいつちも泡のやうに消えた。お前や、Y君や、S君夫婦などと、お互ひに誘ひ合つて——最初には劇しい苛責と羞恥とを感じながら、後には夢中になつて——夜おそくまで花牌を遊ぶやうなことが多かつたのも、矢張りその要求の一つの變形であつた。あの時分のことを思ふと、おれは本當に耻かしい。地の中に入つても、おれの靈魂が知つて居ると思ふと、おれは自分で自分が焼かれるやうな氣がする。

ずつと前からお前の姉さんが今度の法事には歸つて來るやうにと言つて寄越した時も、おれはお前が居なくなれば困るなと思ひながら、お前には是非行くやうにと言つた。

『行けさうもない。』

お前は顔を曇らせながら投げやるやうにその時さう言つた。おれはその言葉の調子が氣に食はなかつた。そしてお前の感情に負けて居る状態を救はうと思つた。けれどもさういふ場合に殊に強情や我儘といふお前の最も悪い方面の性質に壓倒されるお前を困りつけて來たおれは、それを躊躇した。またその言葉の持つて居る内容に對してはおれは自分を耻ぢた。それで黙つてしまつた。けれども今から思へば、それはおれのお前に對する愛が足りなかつたのだと言はなければならぬ。兎に角その時おれはどんなに苦しい工面をしてもお前を國へ歸したいと思つた。けれどもそれはおれの本當な心持からではなかつた。矢張り唯だ遁れないやうな卑怯な心持からであつ



た。

然しさうした要求はお前自身の中にも動いて居た。二人は別々に居てうまく行く方法などを相談しはじめた。然しさういふ時は二人は一而却つて心の融和と牽引とを感じた。そしていつも物にならなかつた。その後お前が△△館の仕事を受合つて、それが家でうまく行かなかつた時、お前はそれを仕上げるには一ヶ月位あかるから、今度法事で國に歸つたら序でに向うに居てそれをやつて来ようかと言つた。お前はそれに同意を與へた。そしてお前が家に居て御飯拵へなどする爲に、それも幾分影響するのだらうと思つた。二月の十三日にはおれの兄さんが突然死んだといふ知らせが來た。お前は仕事の都合で直ぐに立たれなかつたので葬式の間には合はなかつた。けれどもお前はあゝした苦しい工面をして——こんなに人に迷惑をかけてまで行く必要がないと思ひながらも、お前は或る力に引きさられるやうにして——遠い九州への旅に上つた。それは勿論兄の亡くなつた跡に行つて見たかつたからだ。そしてもう六年も逢はぬ母や兄弟にも顔を合せなかつたからだ。けれどもまた自分を異つたところに置いて見たいといふ欲望もかなり手傳つて居た。お前は今心からそれが耻かしいやうな氣がする。殊に亡くなつた兄の靈に對して濟まないやうな氣がする。

『こちらの仕事の方さへ都合がよければ、居られるだけ向うへ居ていらつしやい。』

お前もおれが立つ前にそんなことを言つた。然しそれがお前の本當の心持でなかつたことは、おれが旅先でお前の第一信を見るまでもなかつた。おれの心の中にも、急行列車が既に新橋を離

れてからまで相争うて居るものがあつた。

二週間の旅を終へておれは再び東京に歸つた。そして二日と経たないうちに、おれはおれの心のうちに、家のうちに、反逆者を見た。おれは自分と自分の家とを呪ひたひやうな氣がした。然し事實に於ておれはお前に對する愛を一層深くして居た。それだけにまたお前を憎む心も強くなつた。おれがお前に手を加へたことは曾てないことであつた。

或る日おれは仕事の用向きで小石川にCさんを訪ねた。話のあとでCさんはおれに言つた。

『一體君達はどうするんだね。』

おれは何のことか分らなかつたので、黙つてCさんの目を見詰めて居ると、Cさんはまた言葉を次いだ。

『どつちかにきめればいゝぢやないか、別々になるならなるやうに。——實はこの間君が來て、君達が別居するとか、T子さんがH君に馬鹿な逢ひ方をした爲めだとか、いろ／＼噂があつて居るやうに話して居たからねえ。——然し僕は別居といふことは本當でないと思つて居る。別居する位なら別れてしまつた方がいゝと思ふ。』

まさか世間の噂に上つて居ようとはおれも意外だつた。然しおれは自分達よりも先きにチャンと理由をつけて捌いて居てくれる彼等を輕蔑する前に、最初の種を播いた自分達を耻ぢた。

『Aさんの家に行つた時、L子に逢つて、私にどうして丸鬚なんぞに結ふのといふから、私が冗談に、今に家庭を破壊すると結はれなくなるからと言つたことから傳はつたのかも知れない。』





られた。然し兎に角おれはお前よりも一歩先きに居た。おれは絶望的になりつゝもまた引返して来てお前に向つた。然しなかなかお前の中に革命は起りさうもなかつた。どうかするとおれは疲れてお前に無關心な態度を取ることがあつた。するとお前はおれを愛がないと言つて責めた。おれは自分の力の足りないのを耻づた。

然し最近になつて、お前はお前自身が分つて来た。同時にそれはおれが分つて来たことであつた。矢張り暗闘はあつた。けれども和解の最初に、お前は『どんなことがあつてもエチカと前れはしない。』とおれの耳に囁くやうになつた。また自分の今までの愛し方が間違つて居たとも言つた。おれはおれの愛がお前の中に次第に生長して居るのを感じた。勤勉に働いて居るお前を見ると、『愛すべき女よ!』と心に言つて、そつと後ろから撫で、やりたいやうな氣がした。そしておれはおれの中に、次第に力の湧いて来るのを覺えた。これはつい四五日前にE君から聞いたのだが、お前はおれが九州に行つたあとでE君やK子さんなどと話したとき、此頃漸くKの言ふことが分るやうになつて來たと言つたさうだね。おれはそれを聞いた時、ホントに嬉しかつた。長い苦しい戦ひの疲れが一時に癒つたやうな氣がした。

T子よ、斯うしておれはお前を理解すればするほどお前に對する愛の深く強くなつて行くのを覺える。おれはそれを感謝する。なせと言つてそれは同時におれが深く強くなることだからである。愛には決して限度がない。一人の人に對しても、愛は求むれが求むるほど出て来る。一生涯かゝつても汲み盡せない。倦くといふことは耻辱だ。眞に求むることを知る人にのみ愛は常に



おれが家に歸つてお前に話すと、お前はそんなことを言つた。おれはお前の不謹慎を責めた。然しおれにも責任はあると思つた。今度お前がそちらに立つたあとで、おれがCさんを訪ねると、Cさんはまたそのことを話し出した。

『先達でRさんに逢つたら、O子なんぞが言ひふらして歩いて居るさうだね、本當かいと言つて聞かれたので、僕は先達で君に言つたやうなことを言つて置いた。』

然しおれはもうその頃はその事を問題にして居なかつたので何んにも言はなかつた。

おれはここで二人の思想上の経過に就ちよつとふり返つて見たい、おれはお前と共に生活するやうになつてから、お前の物質的自然主義の思想にはかなり苦しめられた。その思想はお前の非宗教的な天性と最もよく抱合して、實に頑固によくそれを守持した。殊にその最も悪い方面の特質たる經驗主義なところがおれに痛ましい打撃を與へた。おれはそれと戦ふ爲にどれほど自分の精力を消耗したか知れない。或る時はそれに對して絶望的な心持になつた。然し新しい文學上の運動が次第に我々の周圍に響いて來ると、お前の心に眠つて居た靈魂は、無意識に動き出した。不安がそこを窺つてそつと歩み寄つて來た。そしてお前は苦しみ初めた。お前が殊に外出好きになつたのもその頃からであつた。おれはそれをどうかしなればならぬと思つた。然しおれにもまたその頃はハッキリして居なかつたので、力が乏しかつた。おれはまたおれのことと苦しんで居た、身體のこともあつた、暗い恐ろしい夢のうちに。そしてお前自身のうちの悲劇とおれ自身のうちの悲劇とは、前に言つたやうな二人の生活の外的現象と相即して痛ましい争闘が続け



新たな生命を與へるのだ。今こそおれは言ふであらう。おれは弱かつた。誤魔化した。逃げた。然し今はさうでない。おれは靈魂を獲んで居る。おれは眞理を求めて居る。おれは正面から向つて行ける。お前は今後ともおれを困らせるだらう。おれはその爲に苦しむことも多いだらう。けれども今はそれもおれに取つて神聖な食物とならなければならぬ。それがまたお前を眞に愛することである。お前はこの心持が分つてくれなければいけない。本當に分つてくれなければいけない。お前の靈魂に觸れ合はうとするおれの努力を、その願望を……

『私の心は今落ついてゐません。たゞ早く東京にかへりたくて泣きたいやうな氣持になつて居ります。さうして今晚にもいつぞかへつてしまはうかしらとうつかり思ひ立つては、丁度勘當されて居ることを思ひ出した時のやうに、情なく悲しくなつてまゐります。私はまだかへることが出来ないんですね。』

『私は今あなたのお手紙に對して返事をかくことが出来ない。決して避けるのぢやない、書けないのです。私はたゞすべてがゆるされていゝと思ふほど、さびしく悲しく、そしてエチカの傍に行きたがつて居ます。けれども私はまだかへれないでせう。かへれないでせう。』

お前はまたこんなことも書いた。それはお前が立つ前に、『然し直ぐ歸りたくなるかもしれない。』と言つた時、おれが『おれも少し勉強しようと思つて居るから、いゝと言ふまでは歸つて来ちゃいけない。』と言つたからであらう。けれどもおれは今そんなことを思つて居ない。お前が

いつ歸つて来てもいゝと思つて居る。おれはその覺悟をして居る。そしておれの手はいつもお前に對つて開つて居る。お前にも家で仕事をさせることが出来ると信じて居る。然し恐らくお前はそちらで豫定の行動を取るであらう。

猫のことは心配はない。おれは彼等の御飯拵へをしてやるのがさう面倒でなくなつた。外から駈け込んで来て、おれの机の傍に立止まりながら、さも不思議なものでも見るやうな眼でおれの顔を見るチョコの頓狂な顔を見ると、ちよつと抱いてやらすには居られない。彼はおれが外から歸つて来るといつも玄關で胸に飛びあがる。扉の上なんぞに乗つて、おれの歸りを待つて居ることもある。カメのハンブルな顔も今はおれに對して一種の力を持つやうになつた。

言ひ足りないがこれで筆を擱く。お前は『こんなに手紙をかくのに私の筆がにぶつたことはありません。あなたは心を包んで居るからといふやうに仰在るかもしれません。仕方がありません。なせだか私は悲しい。』と言つて居る。若しこの手紙が少しでもお前のその惑ひと悲しみを解くことが出来れば、おれは大變仕合せに思ふであらう。さやうなら。

御身のエチカより





編輯室より

△本號の「新しい女の群」は、新しい女と言はれてゐる人々に對して、日頃よくそれらの人々を知つてゐる方に少しものを言つて頂かうと思つたのですが、所期通りの結果を得なかつたのは残念でした。然しその所期とは違つたけれども、それ／＼面白い御意見なり、當の人の面影なりに接することが出来たのは仕合せでした。謹でそれらの方に御禮を申し上げます。

△投稿の方でまだ反則をやつてゐる人があります。例へば短歌や俳句をハガキに書かなかつたり、行數を超過させたりしてですね。度々小言をいふやうですが、それも諸君のことを思ふからです。折角苦心して作つたものを、見す／＼没書にさせては損ぢやありませんか。何しろ投稿でもしようといふからには、毎號載つてゐる募集規定位よく見てからにして頂きたいと思ひます。

懸賞作品募集規定

- ▽論文 (二十字詰六十行以内)
- ▽散文 (二十字詰六十行以内)
- ▽書簡文 (二十字詰五十行以内)
- ▽長詩 (四十行以内)
- ▽短文 (二十字詰十五行以内)
- ▽短歌 (三首以内)
- ▽俳句 (三句以内)
- ▽小説 (二十字詰百四十行以内)
- ▽胸繪 (一頁以下、三個以内)
- ▽賞品 論文、散文、書簡文、長詩は貳圓以下の圖書切符、短文、短歌、俳句、胸繪は壹圓以下の圖書切符を呈す。小説は壹圓以上四圓以下の圖書切符。尙各種目を通じて特に優秀の作あれば參圓以上拾圓以下の現金を呈す。賞品發達は發表後十五日以後。
- ▽投稿者心得 ①投稿締切は毎月末日。投稿は各種一人一篇(若くは規定の數)に限る。②用紙は半紙又は原稿紙、書體は楷書、假名は平假名。短歌、俳句は官製ハガキに胸繪は筆水引薄葉に認むる事。③住所姓名は投稿の題の下に明記す。④匿名の者は没書。⑤投稿の篇首に文の種目を朱書す。⑥封筒の宛名は忠誠堂編輯局とし、傍に必ず『中央文學原稿』と朱書すべし。⑦當選者は寫眞一葉送附の事。

中學

世界

第九卷 第五號

正價二十錢 郵稅二錢

文庫世界

●櫻の實の熟する時 (長篇) 島崎藤村  
●杜若 鈴木三重吉  
●小窓 德田秋江

抵抗への抵抗

●抵抗への抵抗 三宅 隆  
●抵抗への抵抗 長谷川 天  
●抵抗への抵抗 桑名 技師  
●抵抗への抵抗 桑名 技師  
●抵抗への抵抗 桑名 技師

青年學生諸君

●青年學生諸君 伯 大隈重信  
●青年學生諸君 伯 大隈重信  
●青年學生諸君 伯 大隈重信

思索と感興

●思索と感興 田山 花袋  
●思索と感興 田山 花袋  
●思索と感興 田山 花袋

毎月一回一日發行

| 定價表               |
|-------------------|
| 一冊 金拾五錢 (郵稅壹錢五厘)  |
| 三冊 金四拾五錢 (郵稅四錢五厘) |
| 六冊 金九拾錢 (郵稅四錢五厘)  |
| 七冊 金壹圓拾錢 (郵稅四錢五厘) |

| 廣告料          |
|--------------|
| (壹等) 一頁 金拾貳圓 |
| (貳等) 一頁 金拾貳圓 |
| (參等) 一頁 金拾貳圓 |
| (四等) 一頁 金拾貳圓 |

大正三年四月廿五日印刷納本 (第二卷)  
大正三年五月一日發行 (第四號)  
編輯兼 高倉嘉夫  
印刷所 忠誠堂印刷部  
發行所 忠誠堂  
振替口座東京二〇四三二番  
電話本局四九六六番  
大賣 東京堂○東海堂○山○上田屋  
捌所 北隆館○良明堂○至誠堂○文林堂